

2019年4月5日 大学院人文公共学府に入学  
された皆さんへ

人文公共学府長 水島治郎

皆さん、本日は千葉大学大学院人文公共学府にご入学されましたこと、誠にめでとうございます。人文公共学府の教職員一同、心より皆様を歓迎いたします。これから皆さんは、人文公共学府において研究生生活を送ることになるわけですが、ぜひ充実した日々を送ることができるよう、私たちもできるかぎり、お役に立てるよう努力したいと思っております。

本日、皆さんの入学したこの人文公共学府は、文学や言語学、歴史学、経済学、政治学、政策学、教育学など、人文社会系の諸学問を横断する学際的な大学院です。そのため、教員も学生も、その専門は多様な分野にわたります。大学院の授業で共に学ぶ学生たちは、皆さんの問題関心と違ったアプローチをとる人であるかもしれません。また、留学生、社会人の入学者も多く、バックグラウンドが多様です。自分の思ってもみなかった視点を知る機会も多々あります。その意味でも、皆様には自分の枠組みを超えて、多くのことを学んでいただきたいと思っています。

ところで、この二年ほど、日本でベストセラーとなっている『君たちはどう生きるか』という本があります。小説版と漫画版があります。本屋に行けば、入口に山積みにされています。すでに合計で200万部以上売れている、文字通りのミリオンセラーです。老若男女問わず幅広い読者に読まれています。この吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』が最初に出版されたのは、1937年、今から実に80年以上前のことでした。しかし80年の時を超え、昭和、平成、そして恐らくは令和に至るまで、読まれ続けているのです。

この本の主人公は、コペル君というあだ名で呼ばれる日本の少年です。コペル君は幼くして父親を喪ったのですが、時々やつてくるおじさんと対話しながら、様々なことを体験し、悩み、もがきながら、一步一步成長していくのです。

この本には、友情とは何か、人生の生きる意味とは何か、といった根本的で、普遍的なテーマが散りばめられています。また、貧困や格差といった、現代に通じる問題も描かれています。まさにこの本は、80年たっても古びることなく、今も人々の心を打つ、古典にふさわしい本だといえるでしょう。

実はこの本は、大学院という場で学ぶ、研究する私たちにとっても、重要な示唆を与える本だ、と私は考えております。

主人公にコペル君とあだ名をつけたのは、彼のおじさんです。コペルニクスにちなみ、コペル君とつけたのですね。このあだ名のきっかけは、次のようなものでした。霧雨の降りしきる中、コペル君とおじさんは、銀座のデパートの屋上から東京の街を見下ろします。その時コペル君は、眼下の人々の動きを見ながら、自分を含む一人一人の人間は、分子のような存在ではないか、その無数の分子が動き、つながりながら、世界を作っているのではないか、ということに思い至ります。なかなか、変わった少年ですよ。しかしおじさんは、その発見は素晴らしい発見だと考えます。そして天動説に抗して地動説を唱えたコペルニクスのような快挙として、彼にコペル君というあだ名をつけたのです。

自分を中心に考えるのではなく、自分も世界のなかの一部分であること、社会を形作る一つの存在だということに気づくこと、それはまさに「コペルニクスの転回」なのでしょう。

大人である私たちから見れば、このコペル君の発見は、こどもらしい、他愛もない思い付きであるかもしれない。しかし歴史を振り返れば、偉大な発見や研究も、その多くは、ふとした思い付きだったり、日常の中の何気ない気づきから始まっています。むしろ大切なことは、そのようなきっかけを一蹴せず、どのように活かし、努力して発展させることができるか、ということではないでしょうか。その意味でこの『君たちはどう生きるか』という本は、実は研究に携わる私たちに、その初心を振り返る、重要なきっかけを与える本でもあると思うのです。

これから大学院で研究を始められる皆さんには、ぜひコペル君のように、多くの気づきを得て、発見し、体験し、探求していただきたい。その気づきを大切に、自分を信じ、学びを深めていただきたい。その過程では、悩みもあるでしょう。しかしその先に、さらなる気づきが、発見が、そして新しい世界があるのです。人文公共学府での学びを通じ、新たなコペル君一もちろんそれは、男性・女性を問いません。が次々と生まれることを、願っています。

「君たちは、どう学ぶか」——『君たちはどう生きるか』に倣っていえば、大学院で皆さんに問われているのは、「君たちはどう学ぶか」、ということになりましょうか。そして私たち教職員の場合は、コペル君を励まし、対話を重ねていく、おじさん、そしておばさんの役回りを演じていくのだらう、と思うのです。

「君たちは、どう学ぶのか」。その答えを、2年後、あるいは3年後の修了式の時に、見せていただきたい。皆さんのご活躍を期待しております。ありがとうございました。